

<会員による自著紹介> * 紹介者である会員

学生と変える大学教育 FD を楽しむという発想

清水 亮¹⁾ (編著)・橋本 勝²⁾ (編著)・
松本美奈³⁾ (編著)・山内正平⁴⁾・
小林祐也⁵⁾*・松本 茂⁶⁾・中井俊樹⁷⁾・
青野 透⁸⁾・間中和歌江⁹⁾・天野憲樹¹⁰⁾・
山内 源¹¹⁾・福田詔子¹²⁾・木野 茂¹³⁾・
大門正幸¹⁴⁾・鈴木久男¹⁵⁾・小田隆治¹⁶⁾・
圓月勝博¹⁷⁾

- 1) 三重中京大学・2),10),11) 岡山大学・
3) 読売新聞東京本社・4) 千葉大学・
5) 京都大学大学院・6) 立教大学・7) 名古屋大学・
8) 金沢大学・9) 東京純心女子大学・
12) 市役所・13) 立命館大学・14) 中部大学・
15) 北海道大学・16) 山形大学・17) 同志社大学



ナカニシヤ出版 (2009 年発行)

定価 3,456 円 (税込)

本書は、FD が学生をどう変えたのか、これからの大学教育はどうなるのか……、がテーマになっています。小林祐也 (現 関西大学大学院) は、第 3 章を担当し、授業では、教員以外に授業テーマに精通した専門家が必要になってくるなかで、ある程度の学問経験を積んだ院生が TA として、学生が学問を学ぶ困難さの克服に貢献する可能性をもつ、と大学授業における TA の活用の重要性を強調して書きました。そして、教員が授業に専念でき、学生がピアーとしての院生のファシリテートを通してより授業内容の理解が深まり、そして院生は教育実践から学ぶ、という一連のシステムを、日本の大学教育において確立するための議論を早急に進めるべきではないかという主張を展開しました。

あわせて、大学授業でどのようにすればフィールドワークの活用を「進化」させていくことができるかについて実際の授業実践を通して考察しています。まず、学問の面白さを分からせるという点から、京都文教大学の松田凡氏の「プロジェクト・ウオプル」を取り上げました。学生にとって、単なる海外研修ではない、深い学びが生まれています。対照的に、体験から学びを構築していくような方法として、2 節では、京都精華大学の板倉豊氏が 2008 年当時担当していた「炭焼きを通して見た自然」ゼミでの実際の学生の取組を詳細に紹介しています。ゼミでは、一見すると授業にはみえない、しかし学生は、「非日常的な」体験を通して生き生きと学んでいました。これこそが、真のアクティブラーニングではないのでしょうか。是非読んでみてください。

——皆さんは、初年次教育においてフィールドワークを、TA を、どう考えますか。